



Blind

SHANNON HOON interview ボクらは各ジャンルを

Melon



ニューオリンズ発シカゴ経由シアトル行き? あらゆる地域性と党派性を踏破して

奏でられる音楽の五穀豊饒、ブラインド・メロン『スープ』

全てを備えている、言うなればビュッフェ・バンドだ

構成=増井修 インタヴュー=RURIKO DUER 撮影=老田秀夫

「皆の作業がひとつのCDになるんだ。誰か一人が全部曲作ったら少しも面白くない作品になったと思うよ」

●でも、デジジョンメーカーは本当にいないんですか？

「いや、いつも多数決さ。で、たまには3対2になったりして、でも、最初からの決まりだか、皆、少数派になった経験あるよ。ボクもある。くやしんだよね。3対2だぜ。大問題でも多数決だからさ。3人と2人の顔の表情が全然違うんだぜ(笑)。でもその方が良いんだよ。誰もパンクリーダーのプレッシャーなんかほしくないんだからさ。ボクはイヤだし、連中もイヤだろうよ」

●それが絶妙ブレンドの秘訣なんですかねえ、やつぱり。一方でそれぞれが住んでいる街の特色というのうまく反映されてますよね。

「うん。シカゴはブルースの街で、パディガイの持つるライヴハウスがあって、ブルースがとにかくすごい。ニューオーリンズはジャズだ。シカゴはグラランジ。ボクらはローカルの音楽にすばりとかつてみるのさ。シカゴのブルースはすごいよ。ボクはジャズなんて興味なかった。グリーンがジャズが好きでボクに影響を与えたんだ。彼はボクに色んな音楽を紹介してくれたよ。ニューオーリンズにいた時に天才の盲目のブルースギタリストがいて、座ってギター弾くんだけ。ピックを使わないでさ、手をこきやってギターを弾くんだけ(と)いったマネをする、ずっとそうやって弾いてたから指が変形してたよ。5本指を使うんだ、こきやってすこしかた、ブラッドはボクにジャコ・パストリアスを教えてくれた。ブラッドはジャコが大好きさ。バンドのお互いの音楽のスタイルがお互いを刺激してるよ」

●音楽的な最終目標って、あなた達にもあるの求めているんですか？

「前進していきたくて事だけ。このレコード「スー」が気に入って成長して、前進したからさ。毎回レコードを出すたびに成長してたいと思ってるね。それがゴールだね。前進するって事。ボクらは別に何かの結論をいそいでる訳じゃない。セールスに関しては全くどうでも良い事で、このレコードが前作より進歩したって事が何なんだ

前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

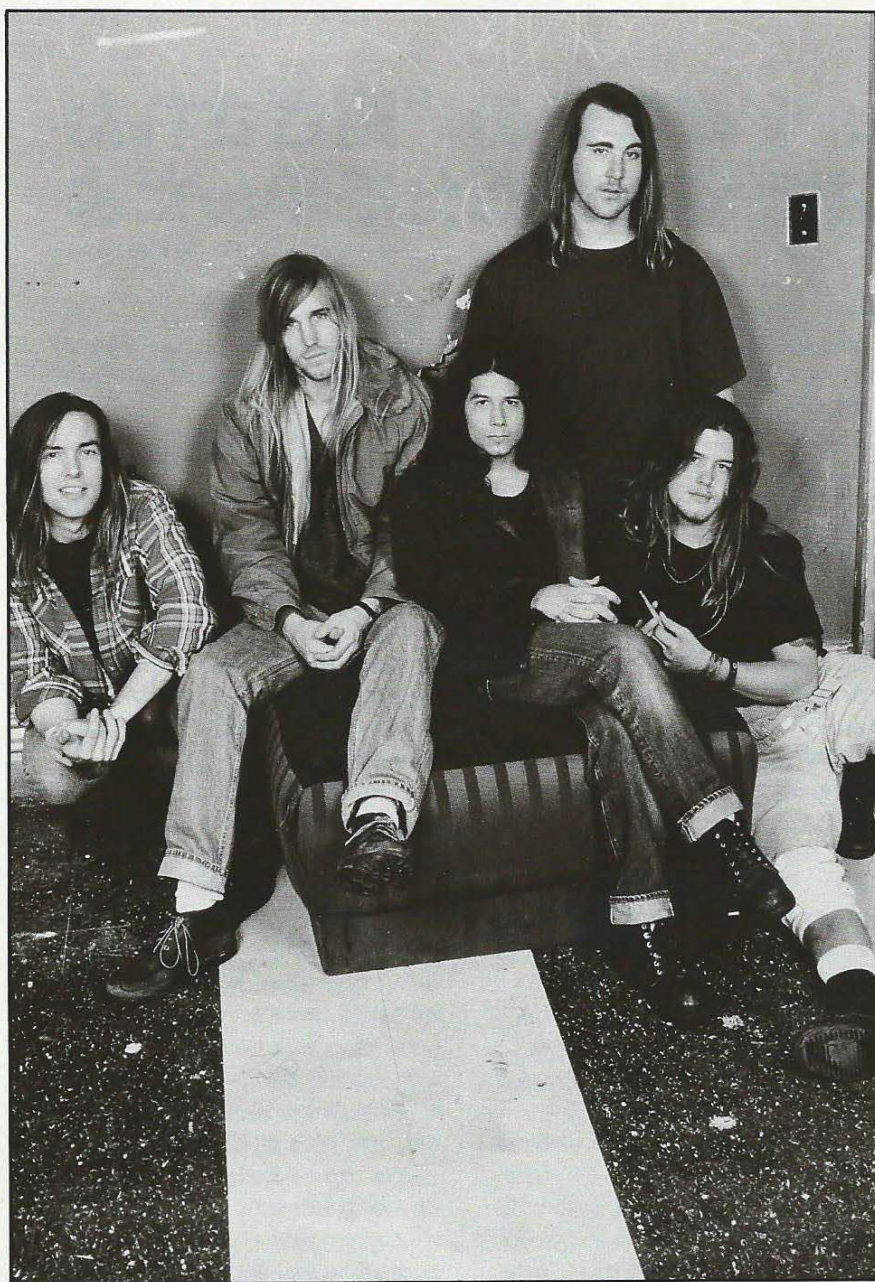
「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

「前作より売れなくても問題じゃないよ。出来には」

SHANNON HOON BLIND MELON



目覚めたってわけさ。

もし俺がロサンゼルスみたいな場所で育ったなら、そういう場所を当然だと思ったんだろうけど、俺はブッ飛んじまった！ だからロサンゼルスではとても成長したよ。大学で4〜5年間学ぶ以上のものを、ロサンゼルスの2年間で学んだんだ。

スポーツで奨学金をもらって 大学に行きたいと思ったけど…

——家族に対して、親近感を持てる面はある？

シャノン 全くないね。俺の家族を一つの集団として見ると、俺が好意を持てる人間は明らかに一人もいない。俺の両親は俺が16か17歳の頃離婚したから、クリスマスの時期には、別々に4回ものクリスマス・ディナーをとらなきゃいけないんだ。それも、お互いの悪口つきでね。だから毎年この時期になると、俺はヘンな気分になっちゃう。理解したくないし、理解できないことから、精神的に耳をふさいでしまうんだ。

俺の両親は元ヒッピーで、オヤジはバイクを乗り回したり、整備するのが好きで、オフクロは可

愛い子供がそのままオトナになったって感じなんだ。とにかく俺は、やりたいことがやれる環境にはいなかったよ。ラファイエットではとても抑えられていたから、法律を犯さずには自分の好きなことなんてできなかったね。

——子供の頃から、ロック・ミュージシャンになりたいと思っていたの？

シャノン 俺の育ってきた環境の中では、常に音楽は俺の生活の一部だった。オフクロが音楽雑誌を買っていて、それに歌詞が載っていたから、いつもバスルームで歌っていたよ。バスルームだとよく聴こえたから、歌うためにはベストな場所だったね。

そんな風に、常に音楽には愛着があったけど、音楽が最優先じゃなかったよ。というのも、俺はスポーツに夢中で、ハイスクールを通してずっとアメリカン・フットボールをしていたし、棒高飛びや、レスリングもやってたんだ。で、スポーツで奨学金をもらって、地元のみんなと同じようにパーデュ大学に行きたいと思ったんだけど、学業のほうの成績が充分じゃないことに気づいたん

だよ。この現実には打ちのめされたよ。俺の人生は行きづまり、古い工場での仕事に就き、あの楽しみは結婚して子供を持つだけ、という、型にはまった暮らしになったんだ。それまでの俺には、やりたいことが山のようにあったのにね。

そんな生活の中で俺を楽しませてくれたのは、歌を歌ったり、曲を作ったりすることだけだった。その後、俺は地元のヤツらとバンドを始めたんだけど、そこで自分のやりたいことがハッキリして、このバンドではダメだとわかったわけさ。それからロサンゼルスに出て、今のバンドのメンバーと出会ったんだ。不思議なことに俺達が集まった時、“よし、これがバンドだ” っていう思いが、みんなに共通していたよ。

俺達には優秀なマネージャーと レコード会社と、弁護士がいる

——ところで、あなたはGN'Rのアルバムに参加しているけど、彼らからどんなことを学んだ？

シャノン 彼らというより、アクセルからだね。というのもアクセルと俺とは、もう長い付き合いの友達なんだ。で、俺は、もし彼らから学んだのであれば、きっとかなり苦勞して学ばなければならないような、価値のあることを学んだんだ。それは、この音楽業界で人々がどういう風にだまされ、それを避けるためにはどうしたらいいか、ってことだよ。それは、音楽業界の“閉ざされた向こう側”にある秘密の部分だから、普通これを知るには、かなり高くつくもんだけどね。

それから、自分の弁護士が目を通すまでは、誰とも、何にもサインするな、ってことも学んだね。もしそれが守れたなら、何に遭遇しても大丈夫さ。俺達には恐ろしいほどに優れた弁護士がいて、面倒をみってくれるんだから。俺は弁護士じゃないから、何が合法で、何がそうじゃないかわからないけど、彼がいることで、とても安心できるんだ。それに俺達には、素晴らしいマネージャー（GN'Rと同じ『ビッグFD』マネージメントに所属）もついているし…、つまり、優秀な弁護士と、マネージャーと、レコード会社がついてるってわけさ。

——それじゃ、最後に聞きたいんだけど、どうしてブラインド・メロンっていうバンド名にしたの？ とてもブルージーな感じだけど。

シャノン ブラインド・レモン・ジェファークソンっていう古いブルース・プレイヤーがいたんで、ブラインド・メロンっていうバンド名を思いついたんだ。彼はミシシッピのウエスト・ポイントという場所に住んでいた人で、そこは俺達のバンドのメンバーの中の3人、ロジャース・ステイヴンスと、グレン・グラハムと、ブラッド・スミスが育った街でもあるんだけど、訪れてみたら、とてもいい感じだったよ。俺達はそんな風にお互いが生まれ育った場所を訪れるようにしてるんだ。そうすれば、バンドとしての結びつきが強くなり、より親密になれるからね。

「僕、こういう時期ばかり続くとは思っていないから…」

っしゃっているんですか？

S：喜んでくれてるよ。オヤジにしてもそうだけど、ウチは両親共とても好意的にサポートしてくれてるんだ。勿論、ちゃんとした理解を得るまでには時間も掛かったけどね。自分の子供がロック・バンドの一員として活動するようになるのを心底喜ぶ親なんているのかな。普通はこの世界って不健全なものと思えられがちだし、実際バンドのライフスタイルってものにはある種の危険が付きものでもあるから…。だけど最終的には、僕が自分の中にあるアグレッションやフラストレーションといったものを音楽を演奏することで発散しているってことを、両親も理解してくれた。だから他人をむやみに傷付けたり、なんてこともない。音楽を聴くことでそれを解消する人間もいれば、僕みたいな、プレイすることですべてを発散するヤツもいる。その双方が存在し続ける限り、バンド活動ってものも成り立つわけさ。

——で、今のあなたにとっては「バンドのライフスタイル」が心地好いというわけですね？

S：僕らの生活サイクルなんてシンプルなものさ。

——プレイして、旅をして、インタビューを受けて、パーティーして…？

S：僕は決してパーティー狂いのバンドではないよ。昨日はあくまでも例外さ。今はまだ酒が残ってるようなありさまだけど、これから1ヵ月半くらいの間は、きっとパーティーからも遠ざかるだろうと思う。こんな具合に肉体を痛め続けていたら、ホントに駄目になっちゃうよ。僕は基本的に、人と会うのが好きなんだ。知らない人と出会ったり、こうして話したりするのがね。こんな風に過ごしていることを、酒のせいで忘れてしまうなんて絶対嫌だしね(笑)。

——ファンとも話したりします？

S：勿論さ。何故って僕は、ファンを6人目のメンバーとして捉えているからね。だからこそ彼らの言うことには常に耳を傾けるようでありたいんだ。

昔は僕も、窓からTVを放り投げてみたかった。だけど19歳にもなれば、ライフスタイルより音楽自体に魅力を見出すようになるもんさ

——成功を手にしたミュージシャンが、その代償として「本当の友達」を失ってしまった、というような話も時折耳にしますが、あなたにもそういったことは起こりましたか？

S：要するに、物事が一度ウマイ具合に転がり始めると、まるで巨大な顕微鏡のレンズの下に置かれて観察されているかのような状態に陥ってしまうってこと。みんな、その人間が、それだけの報酬を得るには及ばない人間でしかないと思えるための理由が欲しいわけさ。例えばさ…僕がレストランに入って「僕の料理にはチーズをかけないで」って頼んだとするだろ？すると向こうは「ハイハイ、あんたが主役様だからね」となるわけさ。ま、今のところ僕の友達は友達のままでいてくれるけど…時間の経過が答を出してくれるとしか言いようのないことではあるな。

——変わってしまうのは周囲の人間ばかりではなくて、中にはその成功をより大きなものにしたいがために、自らの音楽のスタイルやそれに対する姿勢を変えてしまうミュージシャンもいますよね？

S：それは僕らの場合にはあり得ない。何故って音楽こそが第一番目の要素だからさ。音楽を最優先させる



手袋型になったハチのぬいぐるみはファンからのプレゼントで、ツアー・バスのマスコットの存在。ちなみに、こういう写真を撮ろうと言いついたのは他ならぬシャノン自身。

者にとっては、音楽自体がそうしたもののから影響されないようにディフェンスすることが重要だと思う。それに音楽そのものを最重要視しないのなら、その人は音楽をやるべきじゃないよ。僕は、ビデオを作るために曲を書いたことなんて1度もない。そういう発想から曲を書いている人達って、曲作りから得られる本当のエキサイトメントってものを知らないんじゃないのかな。僕はそれを存分に味わっているよ。とにかく楽曲以上に大切なものなんてないと思うからさ…。

——とはいえ「名声欲」というのも、立派にバンド活動の原動力となり得るわけですよね？あなたにも、いわゆるロック・スターというものに憧れた時期はあったのでしょうか？

S：そりゃあったさ。そういう憧れの感情というのは、何かに入れ込む最初の切っ掛けにはなりやすいものだと思う。大概はそうやって、まずライフスタイルの方に惹きつけられていくのさ。僕だって16〜17歳の頃には「窓からTVを放り投げてみたいなあ」と思ったもんさ(笑)。だけど19歳にもなれば、音楽の本当の魅力というものさ、そうしたライフスタイルの部分ではなく楽曲の中に存在することに気がかされるものなんだ。そして21歳くらいになると、自分の好きな曲というのがどういう傾向のものかも見えてくる。僕は今25歳(この本が出る頃には26歳)だよ。今の僕にとって曲を書くという行為は、神聖な作業ともいえるべきものになっているんだ。

僕も、このバンドの他のメンバー達も、こういう時期ばかり続くとは思っていないから…。僕ら、とても現実的なんだ。こうした現実が、大きな絵のごく一部分でしかないことをちゃんとわかっているつもりさ。僕は、良い曲を書きたいのと同時に、自分の家庭も持ちたいし、子供も欲しい。オヤジやオフクロと過ごす時間も欲しい。勿論兄弟や姉妹、爺さん婆さんともね(笑)。だってみんな年をとっていくんだぜ。僕はそうした生活のノーマルな部分も守っていきたくんだ。

特にオフクロは、さっきも言った通り僕をずっとサポートしてきてくれたし…。ひとつ素晴らしいと思えるのは、僕を通じて音楽に興味を持つようになったことで、彼女自身が非常に若々しくなったってことさ。彼女はもう50代半ばだけど、MTVでプライマスのビデオを観て喜んでくればいいから。あの年齢で、プライマスの何モノだかわかっているんだ。コレって凄いことだと思わない？

——ええ。でも彼女が「グランジ・ファッション」に身を包むようになったらどうします？(笑)

S：今もそれに遠くはないな。何せいつもブラインド・メロンのTシャツを着ているから、彼女は(笑)。その

手のものはいつもオフクロの手元にも郵送しているんだ。昨夜のパーティーでもイロイロもらったけど、それもみんなフェデラル・エクスプレス(主にビジネスに用いられる宅急便システム)で送られることになってる。彼女、いつもそういうのが届くのをワクワクしながら待っているんだよ(笑)。

——ところで子供の頃、具体的なヒーローは誰がいきましたか？

S：シド・バレットかな。ピンク・フロイドが好きだったからね。勿論彼らの作り出していた音楽が、だけど。時にそれは僕を喜ばせ、悲しませ、落ち込ませ…つまり彼らの音楽に接することは、ある意味では精神的逃避の手段でもあったわけだけど、そうした人間の喜怒哀楽を左右するような音楽には本当にのめり込んだよ。それから…キミが全く知らないような人々からも実に多くのインスピレーションを受けてきた。つまりそれは僕の個人的な友人だったり、偶然出会った他人だったりするわけだけど、そういう刺激って、なにも有名人からだけ与えられるものとは限らないだろう？有名だろうと無名だろうと、僕がその人物から触発される可能性の大きさは全く変わらないわけだろ？カツムリからだってインスパイアされることはあるんだからね(笑)。

——例えば、今回一緒にツアーしているニール・ヤングも、あなたにインスピレーションを与えた人物のひとつといえますか？

S：全くその通りさ。彼は、今の世代の若者達に「バンドをやるってことのクールさ」がいかなるものかを教えてくれた人物だといえる。つまり、多くのミュージシャンにとってのルーツになっているのさ。今回のツアーで一番悔やまれるのは、街から街への移動の都合で、彼のショウが行なわれている最中に会場を後にしなければならぬことが多いってことだ。だけど、勿論何回かはちゃんと観る機会にも恵まれて、この前なんか、彼の弾くピアノ…コレがいかにフリー・マーケットか何かで買ったかのようなボロっついヤツなんだけど、そのピアノから3メートルと離れていない所から、彼が「ヘルプレス」をプレイするのを見ていたんだ。震えたね。声を失ってしまったかのようだった。僕はその後20分くらいずっと言葉を発することができなかったよ。彼の音楽は、まさに僕の心を揺り動かすんだ。勿論、他の人々の心も…。

——そういった意味でも、今回のツアーは、あなたにとって願ってもない機会だったわけですね？

S：ああ、間違いない。究極的な機会だったと思う。

——9月下旬からはレニー・クラヴィッツとのツアーが始まるそうですが…ホントにこのふんどあと1年くらいはこの生活が続くような気配ですね。

S：まったく。何だか、普通より早く年をとってしまうような気がするよね(笑)。

——ツアーばかり重なるって、喉の健康を保つのも困難になってくるんじゃないですか？

S：まあね。だけど特別なことは何もしていない。充分な水と睡眠…それだけかな。腹筋運動をしてどうのこうの…みたいな訓練もしていないし。だけど僕の人生の最初の17年間は、スポーツのためにあったと言ってもいいほどなんだ。僕自身、自分はそういう方面に進んでいくとは思ってない。というか、それが僕の当時の希望だったんだよね。その頃の僕にはアイデンティティなんてなかったし、親の言うことに左右される部分っていうのはとても大きかった。だけど17歳の時に初めて僕は自己発見し、その2年後には、親も音

左より：クリストファー・ゾーン(g: 1967年12月16日生まれ)
ロジャース・スティーヴンス(g: 1969年10月31日生まれ)
シャノン・フーン(vo: 1967年9月26日生まれ)
ブラッド・スミス(b: 1968年7月25日生まれ)
グレン・グラハム(ds: 1967年12月5日生まれ)



ド会社が僕らをずっとツアーに出させてくれたおかげさ。それこそが、僕らが何より望んでいたことだったし、彼らからのサポートがあったからこそ僕らはロードに出っぱなしの状態であつたんだ。だから、自分達だけの力でここまで来られたとは思っていないし、沢山の友達に“thank you”の言葉を捧げたい心境なんだ。マネージャーにしろパブリシストにしろ、みんなハングリーによくやってくれたと思うよ。

——彼らにとってもそれは、あなた方やあなた方の音楽を信じているからこそできたことなのでは？

S：その通りさ。とても素晴らしいことだと思うよ。

——基本的には、スタッフに恵まれたのと、度重なるツアーが成功の鍵となったと考えているわけですね？

S：それだけだとは思っていないよ。楽曲、ビデオ、“ノー・レイン”のヒット、タイミング…等々、様々な要素が好都合に重なり合った結果だと思うんだ。実際、僕らはもう次のアルバム作りに取り掛かれる状態にあつたんだ。つまり、次のアルバムを作るにはどうしたらいいかってことを理解できるようになってたっ

てこと。そんな折りに“ノー・レイン”が好反応を得るようになり、僕らはすぐにでもレコーディングを開始できる状態であつたというのに、また半年間ツアーが延長されることになったのさ。いや、半年じゃ済まないかもな。あともう1年くらいまわることになるのかも。仮に半年だったとしても、きっと1年くらいの長さを感じるようになるんじゃないかな(笑)。

——MTVから好サポートを得たとは思いますか？

S：それは疑う余地もない。僕自身、音楽ファンとして身をもってわかってはいるつもりだけど、すべてのバンドが自分達の街にやってくるわけじゃないからね。どんなバンドのツアーにも組み込まれない街、コンサートを観るとなると3時間くらいドライブしなきゃならない街っていうのも沢山あるはずなんだ。そんな街の人々にも近付くことができたのはMTVの恩恵だと思う。それが爆発的な反応に繋がったと考えるのが自然だろう。だから僕らはMTVにも感謝してる。

——ただひとつ問題があるとすれば、僕らがいかなるバンドかを、“ノー・レイン”のビデオだけで判断して

しまおうとする人が確実に存在することかな。御存知の通り、僕らのアルバムには13もの曲が収められていて、それぞれが異なった色合いを持った作品になっている。“ノー・レイン”みたいな曲ばかりってわけじゃない。MTVを観て僕らを気に入ってくれた人達が、ちゃんとアルバムを通して聴いてくれていると思いたいもんだね。CDプレイヤーをセットするやいなや7曲目の“ノー・レイン”まで早送り…なんて具合じゃないといいんだけど(笑)。

——アルバムには“ノー・レイン”ばかり13曲入っているわけじゃないですかね。

S：あ、それもいいかも。“ノー・レイン”を13種類のヴァージョンで聴かせるアルバムを出したら、それも売れるのかもね(笑)。

——自分自身の姿がMTVで流れているのを観たりすると、どんな気分になりますか？

S：興奮するにしても、せいぜいウチのオフクロの半分程度かな(笑)。

——お母さんはあなた方の成功についてどんな風にお



今月のワールド・メディア・リサーチ

by
Satomi Kataoka

▼シャノン・フーンが死に至った経緯が明らかになり、業界も重い腰を上げミュージシャンのドラッグ問題に取り組み始める

昨年の10月にブラインド・メロンのシャノン・フーンが亡くなって以来、もつと詳しい情報はないのか、と随分問い合わせをいただいた。だが、その後の情報というのはこちらにもまったく入って来ず、カート・コバーンの時と違って事故だしセンセーショナルじゃないから扱いも地味なのだな、などと思っていた。だが何故かここに来て、シャノンの死がマスコミで取り上げられるようになった。その一つがローリング・ストーン誌5月30日号の「HEROIN AND ROCK」というスペシャル・レポート。シャノンの死を契機に、ようやく音楽業界が「アーティストをヘロイン中毒死から救おう」と組織的に動き出し、業界向けのシンポジウムを開いたというレポートで、その中でシャノンが死に至る経緯が明かされているのである。シャノンは10代の頃からアルコールとドラッグに手を出していたが、マネジャーのクリス・ジョ

ーンズによると、ヘロインの誘惑にはギリギリまで抵抗していたという。だが遂に95年の1月、つまりセカンド・アルバム「スーパ」のレコーディング中に、彼はその一線を越えてしまった。ジョーンズによるとその時シャノンは自己嫌悪に陥って泣いていたという。クリス・ジョーンズにとっては、ブラインド・メロンのマネジャーになったその瞬間から、シャノンをいかにして死なせないかの苦闘の連続だった。91年にバンドと契約して最初の仕事も、LAのドラッグ・シーンからシャノンを引き離すために、メンバー全員をLAからノース・カロライナに引っ越させることだった（今思えば、メンバー全員が共同生活をしていただろう、シャノンを「見張る」ためだったのかもしれない）。だが、バンドの人氣が高まるにつれてシャノンのドラッグ使用量も増え、マリワナ、コカイン、そしてヘロインへと移って行った。そんなシャノンにジョーンズは、何度となくリハビリの話を持ち出した。そうだが「時々奴を座らせて、『そろそろ助けを求めてみないか、カウンスラーを見つけてミーティングに出かけてみないか』と話したよ」。だがそういう話し合いが実を結ぶことはなく、ジョ

ーンズも「強制はできない」という冷酷な事実を突きつけられるのみだったという。ただ、そんなシャノンもやむなくリハビリを受けざるを得なかったことが2度あった。1度目の入院は、1994年にヴァンクーヴァーのショーで全裸になり観客に向かって放尿して逮捕された際の、裁判所の判決の一部として課されたものだった。実はこの時、ジョーンズは密かに、リハビリを釈放の条件の一つに加えてくれ、と裁判長に頼んでいたのだそう。翌1995年初めにニューヨーク・オーリンズで私服警官を殴って訴えられた時にも（この頃にはヘロインにも手を出していた）、ジョーンズは同じ手を使ってリハビリ・センター送りを強行した。だがここまで来ても、しかも立ち直りたいという意志を自ら持っているのに、シャノンはリハビリを躊躇し5か月も入院を遅らせ、入院後の経過が良好だったにもかかわらず25日で退院し、すぐにまたドラッグを使い始めたという。このせいで、「スーパ」のリリースは3か月も遅らされた。そして「スーパ」のリリース直前、ジョーンズはメンバー全員にドラッグ・カウンスラーを交えてミーティングを開かせようとした。そこでメン



pic by ED SIRRS

バーたちにシャノンに対する怒りを吐き出させたいと思ったのだ。だがシャノンは出席を拒否し、ミーティングは彼抜きで行われた。この時カウンスラーはメンバーたちに「シャノンはツアーに出られるような状態ではない、少なくとも6か月間の集中治療が必要だ」と警告した。言うまでもなく、ドラッグの誘惑が最も多くするのはツアー中なのだ。しかし、遂にリリースされた「スーパ」の批評家受けが悪く売り上げも芳しくないという状況になって、ジョーンズは「早くツアーに出ろ」というキャピトル・レコードからのプレッシャーをひしひしと感じるようになり、そして遂に、カウンスラーの警告に反してジョーンズはツアーを決行。そこでカウンスラーは、どうしても行くというのなら目付役を連れて行け」と、ツアー中のミュージシャンをドラッグから遠ざけるための「ベビー・シッター」のボボルを紹介してくれた。また、カウンスラーやリハビリ病院と相談の上、ジョーンズはエアロスミス型の「クリン」な「ツアー」を構築。ドラッグはもちろんアルコールも持ち込み禁止で、ツアー・クルーさえもバスや楽屋で酒を飲まないように言い渡された。そして9月にツアーが始まり、ボボルは10月にツアーに合流。だがボボルは自分がバンドにもクルーにも歓迎されないという肌で感じたそう。しかも着任から僅か3日後、彼はシャノンがクラックを吸っているのを目撃。だがあいつはすぐブツを処分したよ。で、その夜は二人でドライブしながら話し合ったんだ。生まれたばかりの娘さんの話や実家の家族とよりを戻す話をしてた。実際、生活を立て直そうと努力しているように見えたよ」ところがその数日後にボボルは、恐らくシャノンの命令で、ジョーンズによって解雇され、そしてその僅か数日後にツアー・バスの中で死んでいるシャノンが発見されたのだった。直接の死因はヘロインではなくコカインのオーヴァードーズだった。

このシャノンの死が、米国レコード芸術科学アカデミー会長のマイケル・グリーンを立ち上げさせた。彼は、生前のシャノンをドラッグ中毒から立ち直らせようとした友人の一人で、シ